

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大牧小】

⑥ 次年度への課題と授業改善策	
知識・技能	学校課題研修によって学びに向かう力や探求する力が増した一方で、テストにおける得点的な「知識・技能」に課題が見られることが多かった。全国学力学習状況調査・さいたま市学習状況調査の分析を行い、児童の実態や課題に即したきめ細かな指導をしていく。また、学習指導要領の指導事項に基づく授業づくりを一層推進し、児童が確実に知識を得た上で、実践を通して知識が定着して定着するようになっている。また、ICTの活用が進む一方で情報の取捨選択にも課題があることがわかった。文章や資料、インターネット上の情報から読み取ったことと自分の意見を区別する力を養っていく必要がある。国語を中心にクラウドや他者参照に頼らずに、まずは自分自身で読み取ったことをまとめたり、発表したりして読解力を高めていくことで学びの基盤をつくってきたい。
思考・判断・表現	学習の個別最適化が進む一方で、自分の考えや意見を更に深めたり広げたりすることに課題が見られることが多かった。自己の学習を適切にふりかえり、正しくメタ認知した上で、修正・改善しながら探求できる単元構想を練っていく必要がある。クラウドの活用による他者参照や学びの「形態」の選択場面を設定し、「整理・分析」の行い方を身に付けさせていく授業づくりをしていきたい。実際の発表や対話によるアウトプットにも課題が見られた。「学びのシンキングサイクル」による授業サイクルを構築し、情報の収集や整理・分析におけるICTの活用を一層推進するとともに、「まとめ・発表」においては、実際の発表や対話をするなど活動も重視していきたい。

① 今年度の課題と授業改善策		
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題> 国語における「図や表と文章、算数における「数量関係と図」など、2つ以上の事柄を関連付けることに苦手感をもっている。 <指導上の課題> 物事を関連付ける学習の基礎的・基本的な事項を丁寧に説明し、習熟につなげる時間が十分に確保されていない。	⇒ 学校課題研修を通して「一斉授業」と「個別最適学習」を意図的に配置した単元構成の研究をする。単元内で「一斉授業」の時間を効果的に配置し、基礎的・基本的事項の確実な定着を図る。【学びの指標アンケート質問⑧「先生が、基本的な内容をわかりやすくしていないに説明してくれる」3.5ポイント以上※昨年度末3.4ポイント】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 教師の指示による学習を淡々と進め、自ら思考したり判断したりせず表現している児童が多い。 <指導上の課題> 学習の方法を児童に任せたり選ばせたりする授業が十分にできていない。	⇒ 学校課題研修を通して「自己調整学習」や「個別最適学習」について研究を進め、授業改善を行う。学年ごとに構成されたメンター・メンティーグループごとに単元開発を行い、課題を解決する方法を児童が自ら選択したり決定したりするような授業実践を積極的に行う。【学びの指標アンケート質問①「授業で解決することを、自分で決めている」3.2ポイント以上※昨年度末3.0ポイント】

⑤ 評価(※) 授業改善策の達成状況	
知識・技能	A 学びの指標アンケート質問⑧「先生が、基本的な内容をわかりやすくしていないに説明してくれる」3.61ポイントで目標値(3.5ポイント以上)を上回った。学校課題研修を通して、単元内の一斉授業と個別最適学習の効果的な位置づけを研究した結果、子どもに学習を委ねる「個別最適学習」が推進された。それに伴い、児童が基礎・基本的な事項をもち合わせていない個別最適学習が進められないことから、教師が児童に基本的な内容を定着させる「一斉授業」の重要性が校内で再確認された。児童の活動時間を増やす授業づくりをした結果、単元や本時で押さえるべき基本的な内容や指導事項の精選がされ、児童にとってわかりやすく丁寧な説明になったと考える。
思考・判断・表現	A 学びの指標アンケート質問①「授業で解決することを、自分で決めている」3.35ポイントで目標値(3.2ポイント以上)を上回った。個別最適学習を推進していったことで、課題や学び方を自分で決めたり調整したりする学習形態が増えた。児童の気付きや疑問、ふりかえりをもとに課題を考える探究的な学習が定着してきた結果だと考える。児童は、「ツール」「形態」等を自分で選択して課題に取り組むことで、主体的に思考・判断し、表現することができるようになったと考える。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

② 全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語の主語・述語の関係を抑える問題に課題がみられた。回答類型をみると述語の理解ができていない、述語の直前の言葉を主語と捉えている児童が多い。主語・述語が文章の最も短い形であり、「主語と述語のみで文章が成立する」ということの押さえが十分でなかったことが考えられる。日常会話を聞いていても、主語が曖昧なまま話している児童も多く、自分の考えを端的に伝えることに課題がある傾向も伺える。この問題も一文が長く、文章の読み取りが苦手な児童や主語と述語の関係を意識できていない児童が述語の近くにある言葉を主語と回答してしまっていると考える。文章の読み取りの際に、主語と述語の関係を押さえ直したり、児童同士の交流の中でも主語と述語を意識した会話を意図的に行ったりしていきたい。
思考・判断・表現	算数の速さをもとめる問題に課題がみられた。この問題では、ある地点までの分速とある地点までの分速が同じであるということとは、速さに変化がないため、分速も変わらないという速さの概念を理解できず、分速と分速を単純に合計してしまうという誤答が多く見られた。授業の中で教師や他の児童と対話しながら学習を進めれば、速さのイメージをもって正しく概念を捉えられる問題だと考える。速さという実感を伴いにくい学習においては、実物を使ったり具体物や操作したりしながら実生活と結び付け、実感を伴った指導をしていく必要がある。速さの学習では、公式に頼り、式の意味を考えずに問題に取り組み児童も多い。式の意味を書かせる発表したりする学習を行い、なぜその公式を使ったのかを説明できる児童を育成していく必要がある。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④ さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、主語と述語の関係の理解が不十分であることがわかった。授業のあり方が変化し、ICTの活用が進む一方で実際の対話を通して「話すこと・聞くこと」の学習時間が相対的に減少し、オンライン上でチャットを使った短い言葉のやりとりが増加した。2年生以降の主語と述語を扱う学習で知識を習得するとともに、主語を意識した実際の対話を通じ技能として定着させていく必要がある。算数では、「数と計算」において、計算の仕組みへの理解が乏しいことによる誤答が多く見られた。整数から小数を引く問題では、位を揃えることができずいたり、分数と小数、整数が混合した問題では、四則計算の順序を正しく計算できていなかったりしていた。どの単元でも必要とされる計算の仕組みや方法については繰り返し問題を解かせて定着していく必要がある。
思考・判断・表現	国語では、「書くこと」への苦手が強いことがわかった。自分の考えを伝えるために効果的な資料を選ぶ問題では、考えの読み取りが不十分であるために適切な資料を選べない児童が多く見られた。文章を要約したり、要点を整理する学習の定着が不足していたと考える。算数では、データの活用に課題が見られた。データから読み取ったことを二次元表にまとめる問題では、読み取ったことを整理して改めて表現することができていない児童が多いことがわかった。自分が理解したことを整理、表現する活動が不足していたと考える。国語・算数両教科において、文章やデータ、資料等の読み取りの定着を徹底するとともに、読み取ったものを整理・分析し、思考したり判断したりしてアウトプットする学習形態を取っていく必要がある。

③ 中間期報告		中間期見直し
	評価(※) 授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B その単元で「つくるべき力」を明確にした授業を行うために、学校課題研修で共有している「単元構想シート」を活用した授業づくりを行っている。特に、「一斉授業」において教師が主導して確実に押さえるべき事項を精選したり、繰り返し確認したりして基礎的・基本的事項の定着の徹底を図っている。	変更なし
思考・判断・表現	B 書籍や文献、動画等から「個別最適学習」についての理論研究を進め、授業実践を始めた。2学期には、教員全員の授業公開や協議を通して、更に授業改善を進める。「児童が自ら学習の目標を設定する」「見通しをもって自分に適した方法で学び方を選んで進める」「自らの学びを振り返る」という、自らの学習を調整しながら学ぶ力を育成している。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)